# 『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第９回】

前回は、わたしたちは知らず知らずのうちにまわりの人に迷惑をかけている。そして人間としての弱さ、未熟さ、そして自己中心性から、他者の人生を傷つけたり、苦しめたり、悲しませたり、負担をかけたりしている … ということを書きました。

きょうは、キリスト教が示す【罪】とは何かをみていきましょう。

## ◇キリスト教がいう〈罪〉とは

具体的に私たちのどんな言動をキリスト教は【罪】と考えているのでしょう。まず、使徒パウロさんに聞いてみます。(パウロについては後日、くわしくお話しする機会があると思います。それほど重要な人物であることを覚えておいてください。)

パウロが書いたといわれる**『ローマの信徒への手紙』**(『ローマ書』または『ロマ書』)は、

**『神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍くなった』**(21 節) 人間は、 …… **『あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲です。彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています』**(29～32 節) と、罪のリストのようなものを挙げています。ここに書いてあるだけで「21 項目」あります

自分のまわりに重い空気が流れていませんか？　「いやぁ、これを罪というのなら、オレ、すっげえ罪人だぜ。どうすりゃいいんだ！」、「キリスト教って、息が詰まりそう … 」。そんな声がいろいろなところから聞こえてきそうです。わかります、ワカリマス。わたしなど、もう 62 年生きていますから、いわば“罪のデパート”というか、“罪の十二単(じゅうにひとえ)”を着て歩いているようなもんですヵ。

## ◇〈大罪〉と〈小罪〉

追い討ちをかけるようですが、いろいろな罪を【大罪】と【小罪】に分けることがあります。

【大罪】とは、「人間として生きるには、こうしなさい」という神様の言葉に逆らって、ひと（他者）の〈いのち〉を脅かす（あるいは奪う）行為、また、他者だけではなく自分自身をも堕落させるような行為を、「それを行うと、どうなるか？」という**結果がわかっていて**、「やるか・やらないか」という**選択の自由をもつ人間が、自らの意志で「やる」と決めて**、実行してしまうことです。**『殺人、姦通、信仰を捨てることなどが通常大罪と呼ばれるが、必ずしも具体的に確定できるものではない』**と、岩島忠彦師は書いています。①高慢　②物欲　③色欲　④貪食　⑤憤怒　⑥怠惰　⑦嫉妬　が【７つの大罪】とも言われます。**『罪そのものというよりも、人間を罪に導く主な情欲をまとめていると考えるべきもの』**（同師）です。

また【小罪】とは、大罪と比べると小さな罪のことです。「神様に逆らってでもやる」

というような明確な意志をもってする行為ではなく、**自分の生き方は神様と結びついているのに、結果的に神様に反することをしてしまう罪**が【小罪】です。【日常の罪】、【軽い罪】とも呼ばれます。「ついついやってしまう」「わかっちゃいるけど、やめられない」よくない行為と言えるでしょう。

「わたしたち人間は罪だらけ」、「こんな人間たちが何億と集まっているのが地球なんだ … 。夢や希望なんて持てっこないッ」と、ため息が出たのではないでしょうか。では、このような状態からどうしたら抜け出ることができるのでしょう。

**◇〈自己中心性〉からの脱却**

たくさんの罪の一つひとつをよく考えてみると、その底に〈共通するもの〉が流れています。それは、「自分さえよければ … 」という**『自己中心性＝エゴイズム』**だと、森一弘師は言います。おそらくほとんどの人たちは、自分の自己中心的な言動がまわりの人たちに迷惑をかけたり、気をわるくさせたりしていることに気づいているはずです。わたしたちのこころの中にある〈良心＝神の声〉が「おまえ、それは間違っているよな … 。それはやっちゃいけないことだよな … 」とささやいているはずです。しかしその声を無視してエゴイズムを押し通し、「オレだけ、わたしだけじゃない … 」と〈みんな〉にちからを得て、良心から逃げます。

森師は、**『わたしたちの人間としての成長は、自己中心性から抜け出していくことにある』**のであり、**『人類全体がお互いに支え合い助け合って生きてい**』て、**『その背後には、さらに神がいます』**と書いておられます。だから**『わたしたちを支えてくれている大きな愛に十分応えていないという意味で罪人』**なのです。

カトリックに限らず、キリスト教各派を信じている人たちは〈クリスチャン〉と呼ばれます。ある人を紹介する際、「この方は敬虔なクリスチャンで … 」と言う人がいます。〈清廉潔白、善良でやさしく、だまされてもイジメられても、ニコニコ笑って耐えているような人間〉がクリスチャン ― というイメージが、そのような紹介のことばが用いられる要因なのでしょう。そのイメージは日本のキリスト教信者が、総人口の「0.845%」（約 107 万人）しかいないことが生み出したものだとも言えます。でもクリスチャンは、〈特別な人間〉ではないのです。

洗礼を受けたら生まれ変わって、スバラシイ人間に変身できる ― な～んてことはゼッタイありません。**『「クリスチャンらしい人格」というものは存在しません。神を信じている、イエスを信じている、聖霊の働きを信じている。それ以上にクリスチャンを特徴づけるものはない … 』**と、富田正樹氏はその著書で述べています。

ではなぜ、“罪の十二単（じゅうにひとえ）”を着ているようなわたしが、毎日恥ずかしげもなく生きていけるのか？　それは**『あなたはそのままで神様にゆるされて生きている』**（同氏）という、一人の人間にとってこれ以上ない**〈恵み〉**が**〈すべての人たち〉**に与えられているからです。わたしたちが**〈生かされ〉〈ゆるされて〉いる**ことについては、別の機会に詳しく書きたいと思います。次回から『わたしが・棄てた・女』に戻り、ミツが〈ある声〉を聴いて、自分が夜勤をしてまで自分と吉岡のために貯めたお金をどう遣うのか … をみていきましょう。

【引用した書籍】　（今回から既出の書籍については、著者及び書名のみ掲載します。）

・日本聖書協会『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき　引照つき』
・大貫隆 他『岩波　キリスト教辞典』　・森　一弘　『キリスト教入門　Ｑ＆Ａ』
・富田正樹　『信じる気持ち　はじめてのキリスト教』（日本キリスト教出版局、2012）